

# 老若男女共同参画社会の子育てを見通す(4)

―生涯発達の“ふるさと”として―

金田 利子

はじめに

信頼のいずみ・発達のふるさと

一番信頼できる人間関係のかたまり、  
それが家庭の他にもう一つありました。  
そのかたまり、それは外見はとっても

小さいけれど、

そのあたたかさは世界一。

これから一生をどう生きていこうか

その出発点になる

人間信頼のいずみ、人間発達のふるさと

ここがあるのでこわくない。

ここがあるのでみんなの中で自分らしく

ずとずっと輝いていける。

これがみんなの〇〇園、

さあ、飛び立とう小学校へ

そして大きな大きな自分自身の人生へ。

右の詩は、筆者が、日頃交流しているある幼稚園（おおぞらキンダーガーデン）の卒園時に子どもたちとその父母へのメッセージとして創り、贈ったものである。この視点が、まさにこの連載の今回の主題になる。

その第一回には基調を、二回、三回目には地域という空間（ヨコ）的支援について取り上げたのに対して、今回は、発達という時間（タテ）的方向への「ふるさと」としての子育て支援について取り上げる。

ここに載せる事例は、筆者のかかわる静岡市内の幼稚園・保育園から寄せて頂いたものであるが、全国各地できつと同じような実践が多々あることと思う。

ここでは、そうした数多な取り組みの一つとして身

近な例を紹介しながら、生涯発達を支える保育の役割について読者の方々とともに考え合う契機としたい。

### 卒園生と園との交流―心の原点の再体験―

次は、自主的に幼稚園をつくり開園六年目の、おおぞらキンダーガーデンのエピソードから、実践家で主任保育者の岡村由紀子さんに右の小見出しの姿をまとめて頂いたものである。

〔事例Ⅰ〕 私の園では、毎年八月、年に一度卒園生が集まって一泊二日の旅行をします。呼掛けは園がしますが参加は自由で一年生から六年生まで、タテにもつながる子どもたちと、保育者が一緒に行く旅行です。

昨年（この年は子ども三十五人と保育者全員）五人の参加でした。夜の交流会で学年ごとの出し物をやることになりました。

二年生は寸劇を創作。参加者のなかに発達のゆつくりな子（ひろきくん）がいますが、その子もいれて考

えたストーリーは、「いもむしがさなぎになり葉っぱを食べ大きくなって蛾になる」というものでした。

いもむしくんは寝袋の中、ひろきくんは、さなぎが食べる「葉っぱ」役、「だって、ヒラヒラしているでしょ。だからヒラヒラしている葉っぱにするというのです（本当にひろちゃんはずっとしていられなくてヒラヒラと自由に動いているイメージにぴったり）。ナレーターも入っていて、五分ほどの寸劇でした。

久しぶりに集まった子どもたちが短時間にみんなの違いを生かして劇をつくる力に感動したのですが、婦りの列車のなかでお漏らしをした男の子のおしっこを自分の紙で一生懸命一緒に拭く様子が見られました。

こうした姿にあまりに心を動かされたので、そのことをお便りにして父母の方にお知らせしました。

すると、次のような感想が寄せられました。

「子どもたちの学校を取り巻く状況は厳しく、そんなことは考えられない」「旅行にいったら、もう絶対今度もいく、楽しかった」と言っている」「帰って

きたら、いままで人に手紙など書いたことのなかったのに、先生にどうしても来年もいきたいという手紙を出す」と言っている」「戻ってきたら、おだやかな感じになった」等々。

この旅行は雨が降り、パーベキューもできないし、大井川上流のため水が冷たく川遊びもほんの少ししかできないし……というように、大人からすれば、十分とはいえない状況だったのです。しかし子どもたちには、そんなことより、「仲間という」という、そのことが何より楽しいのだと改めて思ったものでした。

〔事例2〕へ……略……。私は幼稚園にきてとてもたのしかったし、小学生になって忘れてしまっていたことも思い出しました。だから、みんなに「ありがとう」の気持ちを込めて「クッキー」をつくったよ。

……今度いくときまで私のことおぼえていてね。……本当にたのしかったよ。ありがとう。……

私たちの園では、卒園生が園に遊びにきたとき感想を書いてもらうノートを用意しています。右の文は、

その中の一つで、六年生のなつみちゃんのものです。

なつちゃんは、六年になってから一番仲のよかった友達に「いじめ」にあい不登校になってしまい、そのため気持ちが落ち着かず、家でイライラしたり反抗することが多くなり、家の人も悩んでいて、そのことを電話で私たちに相談されました。その時、おかあさんに「一度幼稚園に遊びにきたら」と、声をかけておいたのですが、なつちゃん本人が「幼稚園にいつてみようかな」とおかあさんに話したということで、実際七月の夏期保育に参加しました。

そのおわりに、前述のようにノートに書いていきました。その後もなつちゃんが休みの日には園に遊びにきています。家でのならなつちゃんは、園にくるようになって、妹への接し方がやさしくなり、自分でよく考えるようになり、今は「将来あおぞら（この幼稚園）の先生になりたい」と言っている（中学校の面接で「とても尊敬できる先生だから」と話した）と聞きました。

〔まとめ〕 卒園生が集まったり、園に遊びにくるとは、自分らしくいられる、受け入れてもらったなど、小さい頃の心の原点を、体で感性として再体験することではないでしょうか。それが今の自分を見つめること、これから自分が生きていく力にもつながっていくような気がします。

### 思春期のゆれを支える心の拠り所として

— 丁子さんとのかわりから —

次は、赤ちゃんのときからの保育園を、思春期の峠で揺れるときに思い出し、園が一緒にその峠を越える支えになつてきた事例である。

それは、昨年十月に園が生まれて無認可時代から三十



周年、認可園になって二十周年を迎えた、静岡市のたんぼ保育園の事例である。その祝賀会でT子さんがあいさつされ、涙声で“たんぼ”に支えられた感謝の思いを語った。筆者もそこに参列しており、前々から思っていた、思春期を支える保育園・幼稚園の役割の事例の一つを実感することができた。そこで、一年までの園長先生・木野久恵さんにT子さんとのかわりについてまとめて頂いた。

〔事例3〕 保育園の時は、ウサギを可愛がり、みんなからも好かれるやさしい子で、卒園時、ウサギがT子さんの家にもらわれ大事にされて長生きしたとのことです。

小学生時代にはあまり交流が無かったのですが、二の時不登校で「非行」的になり、同級の友達が心配して、保育園にもそのことが伝わってきました。同級の親たちも、「放っておけない。他人ごとではない」と心配し、私が呼掛けて集まりをもち、T子さんのお母さんとともに何度か話し合いの場をもちました。

その時の母の悩みは深刻な状況で、かなり老けてしまった様子もあり、できるかぎりの手を尽くそうと、園と交流のある中学校の先生に入ってもらい、「思春期の子どもの様子、内面、親とのかかわりを考え合う会」をつくりました。母にとって、親・兄弟にも言えない悩みを「たんぼ」では言えると、子どもの状況や胸の中につまる思いを出す場になっていたようです。

母は、相談所、校長、生活指導の先生、友達とも相談しながら、本人に対応したが、「“非行”なまといるときが一番いい」と家にも帰らず、母は毎晩わが子を探し疲労困憊し、ついに施設（教護院―一九九八年より“児童自立支援施設”）に入り、中学校の卒業証書は校長先生から施設でもらったようでした。

施設では、きちんと生活し寮母さんから信頼されるようになり、外に常にかかわってくれて信頼できる大人（親以外の）がいて、その人が責任をもってくれるなら、退所してもいいということになりました。

そこで、T子さんが選んだのがたんぼ保育園でした。私は何度か、寮母さんと手紙を交換し、本人にも手紙を書き、職員の同意を得て、保育園として受け入れることにしました。

卒園時担任だった先生が自分の子どものように一生懸命悩みを聴き、毎日話をしていたのですが、最初は来たりこなかったり、毎日母と連絡を取り、「受け入れて待とう」という忍耐の日々でした。

園では、おやつづくり、おもちゃの手づくり、部屋の飾り付けなど、お手伝いをしていました。子どもたちからは「おねえちゃん、おねえちゃん」と慕われ職員も「明日も待ってるよ」と励まし続けてきました。

こうして、およそ一年、収入としては夕方の保育のみアルバイト料を払うという形で過ごしてきた頃、本人の方から、アルバイトを見付けて働きたいと申し出てきました。もう、社会にでも大丈夫、その方向を励まし、ピザの店で働き、ときどき顔をみせてくれていました。それから数年、今では、バイトではなくカラオ

ケボックスのチーフとして生き生きと働いています。

ここ数年は会っていませんでしたが、三十周年の案内をみてやってきてくれました。同時に開催された大同窓会では、マイクを渡されましたが、言葉にならず涙、涙で、「大好きなたんぼ、大好きな先生、卒園して、十年以上経ったときにも、忘れずに揺れているときに声をかけてくれたことがどんなに嬉しかった……等々」が伝わってきました。

この言葉や姿から、T子さんにとって「たんぼ」は、心の拠り所になっていたのだと、みんなも励まされましたし、私もとても嬉しかったのです。

### 自立への支援

— 障害を受けとめ乗りこえつつ —

これは、静岡市で一番早く産休明けからの保育園として認可されたこぐま保育園での事例である。ここでは、障害のある卒園生が給食室でボランティアをしていると聞き、園長の越膳明子さんにまとめて頂いた。

〔事例4〕 昨年春、単位制の総合高校（通信制）の一年生になったYちゃんがやってきました。

Yちゃんは、難聴でかなり聞こえにくいのです。中学生生活はとでも大変でほとんど学校に通えませんでした。親子で悩み、高校に進学した直後、お母さんから相談がありました。「昼間は家で勉強、週に二回学校にいくという生活では行動範囲も狭くなるし心配。いろいろ話す中で、こぐま保育園で何かできることがあるかなということになり……、こぐま保育園なら行ってみたい、何か手伝いたい、ということになった」とのことでした。お母さんとしては、「何でもいいので……」という切実な思いでおられたようでした。

私は、Yちゃん自身の気持ちをちゃんと聞きたい、本人がその思いを伝えてくれることから自立への一歩が始まると思い、久しぶりに会って話すことになりました。「小さい子どもと接したい、他にも何かできることがあったら何でも……」ときちんと話すことができるYちゃんに接し、受けとめる必要があると感じま

した。職員にも提案し、未成年でもあることから、あくまでボランティアであることを確認し、現在まで、給食室の食器洗いと三歳児のおやつの後片付けなどを手伝っています。

Yちゃんは、雨の日も風の日もほとんど休むことなく、時間どおりにやってきました。自転車で三十分位の距離、午後一時前に息を切らして、まっかなホッペで飛び込んでくる彼女は、まだあどけなさの残る十六歳です。三歳児は、「Yお姉ちゃん！」と親しみ、給食室ではとてもあてになる存在です。

このことを通して考えさせられたことがたくさんありました。中でも、若い職員たちが妹のように可愛がり給食室では、「明日は教科書をもっておいでよ」と勉強の手助けなど、目の回るような忙しさの中で、自然な形で受け入れている姿に感動しています。

年が明けて、一月の下旬、Yちゃんが職員室にやってきました。心配そうな声での話は、来年度のことでした。「四月からも、この生活を変えたくない」と言

います。真の自立は、この保育園からもう一度巣立つことなのだと思います。それにはもう少し時間が必要なのだろうと考え「そうだね。四月からも今みたいにしてよね。Ｙちゃんがいてくれて、本当に助かっているんだよ……」と話したことでした。

### 高校生の人権意識への育ちを支える

―意見表明への思いを受けとめて―

幼稚園・保育園では思春期を見通した子育てが、今一つの課題になってきている。

静岡市・清水市を中心に中学・高校生が、「THINK OF EARTH」というグループをつくり、子どもの権利条約を学び、自分たちの権利って？ と考え、みんなで生の声を集める活動をしている。一昨年夏九八〇人もの意見表明をジュネーブの国連子どもの権利委員会まで悪戦苦闘して届けに行ったりもしてきた。

この会は子どもが中心であるが、あくまで黒子として、会を支える大人たちがいる。

その中には保育関係者も加わっている。この活動は幼稚園・保育園の独自の活動ではなく、青少年の主体的な人権意識を育てようと願う多くの層の人たちの一員として保育関係者が加わっていくものである。先にあげたたんぼ保育園の元園長の木野久恵さんもその一人。以下は筆者が木野先生から伺った事例である。

〔事例５〕先生のところへは、権利意識に目覚めた高校生になった卒園生が、よく「聞いて聞いて」とやってくる。たとえば、四月の新学期、卒園生のある女子高校生の場合、朝いくら探しても制服用のネクタイがない。それもそのはず、自分のものとまちがえて父親のタンスにいつてしまっていた。それとは知らず父親は、「ネクタイ一つより遅刻しない方が大事だ」とアドバイス





し、本人もそう思い、ノーネクタイで、急いで登校。その日学校では、そんな事情は聞かず、服装の「規則違反」の生徒たちを、みんなの通る廊下に座らせたという。その日も、憤慨しながら飛び込んできた。

その子は、「THINK OF EARTH」の中心メンバーであり、理不尽な「指導」への怒りとともに、「子どもの権利条約を学んδειながら意見表明できなかった自分への悔しさ」にもいらだち、その思いを信頼する大人に聞いてほしかったようだ。園長先生は聞き役に回る。すると、子ども自身のなかに、自分はどういう行動をとるのがよいか、仲間と共に考えていく勇氣と前向きな姿勢がよみがえってくるという。

### おわりに―生涯発達の「ふるさと」として

老若男女共同参画型社会の子育て、つまりこれからの子育ての支援を考えると、乳幼児がやがて少年・少女に、そして思春期を経て大人になる、さらにはやがて高齢期を生きる人になるというタテの系の出発点

として、乳幼児期の子育てを考えることが大切だと思える。それ故、保育の場は「生涯発達」のふるさとといえる。この視点は、あたたかく育てられた子どもは、やがてあたたかく育てる大人になる可能性が高いと考えるとき、人間と人間の信頼の発展的な循環関係をつくりだしていく、人類史につながるタテの発展への契機となろう。このつながりにおいて、「信頼のいずみ」と「発達のふるさと」は不可分に結合しているものである。その循環がもうまく進んでこなかったときには、前にあげた事例にも見られるが、思春期・青年期に仕切りなおすことが可能になり得る。そこにも幼児期と思春期の関係をつなぐ支えの意味が見いだせる。

カナダの絵本に、Robert Munsch (文)、Sheila McGraw (絵) の作品「LOVE YOU FOREVER」(Afinely Book)というものがある。最近出された日本語訳のものは、「母の想いを伝える暖かい涙の感動の絵本」として売出し、絵の再画もその視点になっているが、原作での「永遠」の意図は、単なる母の愛では

なく、「母から息子へ、息子からそのまた娘へ」という男女で共に担う人生の愛のライフサイクルの永遠がテーマになっている（と筆者は解釈している）。これは、まさに「人類史につながるタテの発展」を象徴しているといえる。

こうした、信頼の基礎は、世紀の転換期に日本がめざしている「競争社会」では育ちにくい。財政学者の、神野直彦氏は、財政学の視点からも「社会とは他者と共存なしには生存できない人間が共同生活を営む場である。いやしくも社会というからには、他者の成功に献身すれば、自己も成功する」という協力原理が埋め込まなければならない」（朝日新聞「論壇」二〇〇〇年一月十日）と言い、「競争社会」を批判している。

信頼が生まれにくい社会システムの中で、人間の人間らしい基礎をしっかりと育てるのが、乳幼児の教育・保育である。それ故、それが、将来までずっとつながっていくように、発達の出発点の保育・教育を

「（人間）信頼のいずみ・（人間）発達のふるさと」としてとらえ、かつ卒園生と園とのつながりを継続していくという、ここで取り上げたような取り組みが、一層大切になって来ているのではないかと思う。

近年よく保育園・幼稚園の五十・三十・二十周年の記念誌が発行されている。最近そのなかに「保育園は子どもの「故郷」」という巻頭言（園長藤井修Ⅱ京都・たかつかさ保育園二十周年誌 一九九九年十一月）に出会った。こうした視点が当然ながら意識されはじめているようである。

今後は、このような記念誌をきちんと分析し、発達の「ふるさと」という視点からその到達点を明らかにするとともに、姿が変わらない安心感のもてるという故郷となれるための条件を、公立の園においてもつくっていく道や、発達の「ふるさと」という視点からも地域と共同していく方向の探求が求められよう。

（静岡大学）